

# 生駒検定〈全国版〉

## 〈問14〉 生駒は日本神話の里

下記の文は「日本書紀」が**生駒の神話**（生駒を舞台にした日本神話）を述べた部分です。（1）～（5）に入る人物は誰でしょう。次の人物名からそれぞれ選んでください。

長髓彦ながすねひこ	三炊屋媛みかしきやひめ	磐余彦尊いわれひこのみこと
可美真手命うましまでのみこと	饒速日命にぎはやひのみこと	

のちに即位して神武天皇となる（1）が、航海と製塩の神である塩土の翁しおつちのおじに聞くと「東の方によい土地があり、青い山が取り巻いている。その中へ天の磐舟あめのいわふねに乗って、とび降ふってきた者がある」とのことであった。そこで思った。「その土地は、大業をひろめ天下を治めるによいであろう。きっとこの国の中心地だろう。そのとび降ってきた者は、（2）というものであろう。そこに行って都をつくるにかぎる」と。

その年冬に、（1）は九州を出立して東征に向った。瀬戸内海を東に向かい、途中、安芸国あきのくに（現広島県）と吉備国きびのくに（現岡山県）に立ち寄り、春に浪速なみはや（現大阪）に着いた。

夏、（1）の軍たる皇軍は兵を整え、生駒山を越えて内つ国うちづくに（大和国やまとのくにのこと／現奈良県）に入ろうとした。そのときに（3）がそれを聞き、「天神てんじん（天津神あまつかみのこと／高天原たかまがはら、つまり天上界に生まれた神のこと）の子がやってくるわけは、きっとわが国を奪おうとするのだらう」といって、富雄川流域から軍を率いて生駒山を越えて孔舎衛坂くさへのさか（別名は草香くさか／生駒山西麓／現東大阪市日下くさか）で戦った。矢が、（1）の兄である五瀬命いつせのみことのひじとすねに当たった。**皇軍は進むことができなかった。**（1）は考えた。「日に向って敵を討つのは、天道てんとう（太陽）に逆らっている。一度退去して弱そうに見せ、背中に太陽を負い、日神ひのかみ（太陽神）の威光をかりて、敵に襲いかかるのがよいだろう。このようにすれば**刃に血ぬらずして、敵はきっと敗れる**だらう」。そこで軍中に告げていった。「いったん停止。**ここから進むな**」と。そして**軍兵を引いた**。（3）の軍も**あえて後を追わなかった**。

その後、皇軍は、紀伊半島を迂回、熊野付近で上陸し、紀伊半島を縦断して大和国に入り、冬、富雄川流域（現生駒市上町付近）で、再び（3）の軍と相見あいまみえた。しかし、戦いを重ねたが仲々勝つことができなかった。そのとき急に空が暗くなってきて、雹ひょうが降ってきた。そこへ金色の不思議な鵞とびが飛んできて、（1）の弓の先にとまった。その鵞は光り輝いて、そのさまは雷光のようであった。このため（3）の軍勢は、皆眩惑されて**力戦できなかつた**。

そこで、（3）は**使いを送って、（1）に言った**。「昔、天神の御子が、天磐船に乗って天降られた。（2）という。この人が我が妹の（4）を娶めとって子ができた。名を（5）という。それで、手前は、（2）を君として仕えている。一体天神の子は二人おられるのか。どうしてまた天神の子と名乗って、人の土地を奪おうとするのか。」と。

（1）がいった。「天神の子は多くいる。」と。

（2）は、もとより天神が深く心配されるのは天孫てんそん（天神の子孫）のことだけであることを知っており、また、天神と人とは全く異なるのだということを（3）に教えても分りそうもないことを見てこれを殺害し、**部下達を率いて帰順した**。

【注】文中の太字は、〈解説〉に必要なため、そうしました。

# 生駒検定〈全国版〉 解答と解説

## 〈問14〉 生駒は日本神話の里

〈解答〉 (1) 磐余彦尊 (2) 饒速日命 (3) 長髓彦 (4) 三炊屋媛 (5) 可美真手命

〈解説〉

(1) 問題文の太字部分に注目すると、生駒の神話は、異なる政治勢力間の武力衝突を回避しようとする物語だといえます。

(2) 生駒の神話には、次の4つを主とするいくつかの謎があります。

①磐余彦尊（即位して神武天皇となる）の軍隊（以下、神武軍）を追い払った長髓彦は、明治になって、皇軍を敗北せしめた逆賊であるとされて以来、学問（実証）的に研究されず、長髓彦とは何者が謎のまま今日に至った。

②長髓彦軍と神武軍との最後の決戦のとき飛来した「金色の鵄」は、長髓彦軍の守護神であった※にもかかわらず長髓彦の軍兵たちを戦わさせない、または、敗北させるようにしたのはなぜか（これが日本神話最大の謎）。

※『生駒市誌』には「金色の鵄は、本来は長髓彦の側のトーテム（神）ではなかったか。」と記されています。

③「金色の鵄」の働きによって神武軍が勝利したかに見えるが、そうではなく、その後、長髓彦軍と神武軍の間で和平交渉が行われたのはなぜか。

④決定的な勝敗がつかないまま、君たる饒速日命が臣たる長髓彦を殺害して磐余彦尊に帰順した（「国譲り」した）のはなぜか。

(3) (2) の①の謎について：村井康彦『出雲と大和』（岩波書店／一昨年1月刊）〈右に表紙写真〉に、「長髓彦は生駒地域の首長ただだけでなく、饒速日命の率いる邪馬台国連合の総大将であった」と、長髓彦が何者であったかが初めて実証的に記述されました。



(4) (2) の②・③・④の謎の解明

A. この3つを順序立てると謎が解けます。すなわち、「守護神（金色の鵄）は長髓彦が他者の命を奪う者へと墮落しないよう守護し、平和的解決を促した⇒和平交渉⇒平和的解決（国譲り）」となります。

「国譲り」とは、国土という限りあるものは相手に平和的に譲り渡し、精神的に相手を統べることです。出雲神話では、大国主命おおくにぬしのみことは出雲の国土は譲り渡しましたが、出雲大社に祀られて精神的な気高い影響力を持続し尊敬されています。同様に、饒速日命も帰順はしましたが、その後、磐船神社など多くの神社で祀られて気高い精神的な影響力（＝永遠なるもの）を維持し尊敬されています。「国譲り」神話は、争いを武力によってではなく平和的に解決することこそ尊い行為であることを説く世界に類を見ない日本が生んだ神話です（憲法第9条を彷彿とさせます）。なお、長髓彦は日本書記では殺害されたことになっていますが、実際は平和的解決を実現するために身を引いたと考えられます。古事記は長髓彦の最後を曖昧にし、東日流外三郡誌つがるそとさんぐんしという古史古伝では、長髓彦は磐余彦尊との戦いのあと日高見ひたかみ（東北地方）の地を新たな故国として移住した、と記されているからです。平安時代初期、蝦夷えみしの指導者として現東北地方の平和維持に奮闘した阿弋流為アテルイは長髓彦の子孫ともいわれています。

B. Aは、「大切な人が他者の命を奪う者へと墮落しないよう戦わせないようにするのが真の愛」「武力によらず平和的に解決することが尊い道」が生駒の神話のメッセージであることを示しています。異なる政治勢力間の抗争を乗り越える道を示すメッセージを世界に発信している神話を生んだ生駒の地に誇りを感じます。

＜ 宮崎駿監督の「もののけ姫」のアシタカ[ヒコ]はナガスネヒコに、同監督の「千と千尋の神隠し」のハク（ニギハヤミコハウヌシ）はニギハヤヒノミコトに由来しているといわれています。このように、生駒の神話の主人公であるナガスネヒコとニギハヤヒノミコトに対する尊崇の念は現在にも受け継がれています。＞